

風土



薫風やつんぼ棧敷のみごこちも

(句集『高蘆』より昭和四十五年作)

この句、「つんぼ棧敷のみごこち」が解りにくいと思います。「つんぼ棧敷」は歌舞伎の劇場で、正面二階棧敷の最後の方の立見席に当たります。役者のせりふがよく聞こえない席であることから、転じていろいろ情報が入らない状態に置かれることを言います。桂郎師もいろいろな俳人たちに混じりながらもこのような経験をしたのでしょう。まあそれもいいか。それにもまして「薫風」が気持ちいいのです。

釣り堀がこんなところに雨の旗

(句集『高蘆』より昭和四十五年作)

『自註石川桂郎集』(俳人協会刊)に拠れば、永井龍男(俳号東門居)邸においての、花見句会での兼題で得たとあります。句の世界は、桂郎師が雨の小道をたどっていくと、藪が突然ひらけ、釣り堀の旗が現れたのです。「へー、こんなところに」釣り堀があるんだとびっくりしました。確かに「釣り堀」の在り様はこうです。

般若寺の中に音して春耕す

(句集『幻』より平成八年作)

「般若寺」は奈良坂の南端に位置し、京街道の要衝にあつたので、たびたびの兵火に焼かれました。十三重の石塔が聳えています。他の寺に比べ境内は荒れています。奈良と言えば盟友の酒井章鬼がいますので、章鬼と般若寺を訪ねた折の句です。寺の塀に沿って歩いてみると、サクサクと畑を耕すような音がします。中に入ると、やはり姉さん被りの青年僧が境内の隅で鋤を打っているではありませんか。般若寺らしい春の景色です。

一合五勺の酔の色紙や花の冷

(句集『幻』より平成八年作)

この句は桂郎師と親交のあつた秋田の森屋けいじ氏の家を訪れた時のものです。けいじ氏は「風土」の幹部同人で、林檎農家でした。桂郎師がたびたび訪れたように、器師も花の頃に立ち寄つたのです。そこで桂郎師の色紙に見えました。きつと酔いが入つてからのものでしょう。酒は好きだったが、そんなに強くなかつた桂郎師を言い止めたのが「一合五勺の酔」なのです。

弓

袋

南
う
み
を

大根の照りをまづ誉めおでん酒

立ち呑みのうるめ三匹あれば足る

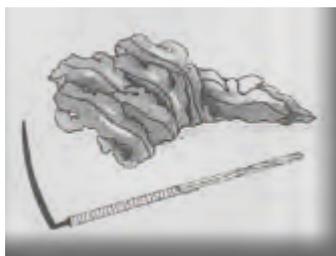
土くれを桂馬跳びして初鴉

三十三間堂通し矢三句

をみならに成人の日の弓袋

肩脱ぎのしらじらしくも弓始

いつせいに放てば戦場めく射初
どの靴も草くづ付けて注連貫
左義長の青竹雪を引きずり来
ことごとくみづうみへ発つ火の吉書
どんど火にくわんおんの頬熱からむ
湯気を噴き弾け三毬杖総くづれ
どんど果つみづうみの端ちよと焦がし



竹間集

同人作品



冬木の芽

鈴木 庸子

町会へころがし貸すや餅の白
酒蔵に甑摺り唄や花八手
おはやしに始まる村の七草会
白息をつつしみ四方清めかな
近づけばつぶやき聞こゆ冬木の芽
眠る山起こさず石を切り出せり
雪女ひさしのやうなまつげつけ

初日記

宮川みね子

冬晴るる長鳴き鶏の畦をゆく
裏庭に人の来てある寒牡丹
冬空の晴れつづきをり去年今年
ゆるやかな刻流れゆく囁れり
ひそやかに庭のたんぽぽひとつ咲く
母の忌につづく夫の忌寒牡丹
身の丈の暮しやはらか初日記

寒九郎

浜 福恵

流木をあつめ浦曲の初焚火
あかときを雨に濡らして寒九郎
鴉にも三枝の札か寒土用
水平線藍濃く流れ寒波来ぬ
西へ走る大音声や鰯起し
獅子崎に雪舟の道寒夕焼
寒の入日のなかに橋立一文字

冬 董 門伝 史会

年歩む流れゆくものみな疾し
天皇寒川神社二句のお手植系の椰淑氣満つ
山門の迎春ねぶたくぐりけり
初鏡母に似てきし眉をひく
万葉の野の彩散らす七日粥
四温晴れ続きて立ち居軽くなる
新元号へ思ひこもごも冬董

寒の月 鈴木 石花

植木屋の去りし翌朝冬木の芽
ライブ終へマニキュア落す年の暮
舟型の蹲踞洗ふ年用意
高僧の円相軸や初日影
本堂に「ななくさなづな」大合唱
夫の待つ家路を照らす寒の月
一室に居所二つ冬籠

白 梅 山田 暢子

一月の暦を剥いで大掃除
誰も来ぬ日々を重ねて早二月
白梅やあの世の人に誕生日
雪の富士こちらは漢検試験中
冴え返る星左手のピアニスト
春の雪予定通りにすぐ消ゆる
菜の花を右に左にペタル踏む

賀状来る 岩木 茂

賀状来る奥の細道越えて来る
まつさらな朝載せ俎始めかな
中天に燃え尽きてゐる吉書かな
さびしほりほそみぞふゆのはなわらび
ひと振りの藻塩いのちに小豆粥
禅僧の草履のしづく氷りをり
寒怒濤響くを蓬萊山といふ

フラミンゴ

浅田
光代

寒明やジャンジャン横丁にソースの香
余寒なを将棋クラブをガラス越し
立春の射的屋に大きカレンダー
道端に売る春服に鯉や竜
春光の羽動物園をまろび出づ
遠足の子にそれは大きな象の尻
黒犀の甲冑春日はね返す
通天閣へキリンたたたむ春の朝

冴返る動物園に慰霊の碑
犬鷺を仰ぐてのひらあつくして
シマウマの律儀な縞や春の雲
鶴唳や動物園をふるはする
春の草はふはふ食める河馬の口
春昼の河馬に会ふ稔典にあふ
ライオンとワタクシの距離水ぬるむ
ライオン横臥全身春の日をまとひ
ライオンは春眠中なので去る
昏き眼に狼檻をひた巡る
ペンギンのうつらうつらやうらけし
フラミンゴの頸いつせいに春風へ

山河集

同人作品



南うみを選

音羽屋の三代そろふ初芝居

森田 節子

繭玉を肩に花形役者かな
齒応への鈴菜の熱し七日粥
冬ぬくし茶室へ木橋石の橋
地方紙の湿りて届く大根かな

白足袋の固く地を噛み弓始

渡辺 やや

出入りにちよいと正して松飾
お雑煮の後にトースト所望さる
風花やチェロ負うて来る辻楽師
四日はや唸り出したる耕耘機

山里に二メートル余の春の雪

伊藤 紫水

土乾く農機具店の庭広げ
頭から一気にかぶる目刺かな

九十の母にこそあれ嫁菜飯
七滝に七つの天よ春うらら

葬送や日暮れ忘れて白鳥は

雨宮 桂子

雪こんこん過ぎにし子らはいづこより
風花やけふも弥彦に佐渡を見ず
雪晴や浄土へ還るてふ教へ
慟哭を聴く白鳥の群れの中

肩車され松の枝に初みくじ

谷田明日香

松籟に福笹の鯛へらへらと
追儼会や幟の絶え間なく軋む
追儼会の太鼓の音と滝音と
跳ねる子の肩に手を置き追儼式

風土独語／南 うみを



冬ぬくし茶室へ木橋石の橋

森田 節子

この句は少ない言葉でたくさんの情報を伝えていきます。「茶室へ」ですので「木橋石の橋」は庭園にあります。作者はこの二つの橋を渡り茶会へおもむくところです。また橋を重ねることで作者の逸る心も汲み取れます。的確で無駄のない句です。

弓始 一矢刈田に突きささる

池田 光子

「阿田木神社」の前書きがあり、そこでの「弓始」です。矢の一本が的を大きく逸れ、「刈田」に突き刺さりました。これでこの神社の在り様や農と一体になった神事であることが読み手に伝わります。なつかしさを覚えます。

埋火や隙間だらけの父の里

山田 健太

この句の読みのポイントは「隙間だらけ」の言葉です。「埋火」は囲炉裏や火鉢の時代なので回想の季語です。存命の頃の父の象徴でしょう。久しぶりに父の故郷に停んだ作者はその荒廃ぶりに嘸然としたのです。廃屋しかり、村人に会わぬことしかり、それを「隙間だらけ」と表現し読み手の想像力を刺激しています。

白足袋の固く地を噛み弓始

渡辺 やや

俳句におけるリアリティはいかに細部が描けるかにかかっています。ここでは「固く地を噛み」がそれに当たります。これで弓を引き絞る時の、足指の踏ん張りがありありと見えるのです。「俳句は見えるように作る」の典型です。

二日目に箸付けてゐるにらみ鯛

上辻 蒼人

「にらみ鯛」または「懸鯛」は、正月に二尾の小鯛を縄で結び、飾りを付けて籠の上に懸け、六日に下し汁にして食べます。無病息災の願いがあるのですが、なんと二日目に下して箸を付けてしまったのです。古い正月行事を大事にしていることが解ります。

九十の母にこそあれ嫁菜飯

伊藤 紫水

「嫁菜飯」は下処理した嫁菜の若葉を、炊いた白飯にまぜたもので、春の息吹、生命力をいただくのです。作者はできたての「嫁菜飯」を齡「九十の母にこそあれ」とその長寿を願うのです。

メレンゲの角きはやかや二月来る

三谷さかゆ

メレンゲは卵白と砂糖を固く泡立てたもので、洋菓子には欠かせません。作者はその固さを「角きはやかや」と頷き、「二月来る」と取り合わせました。早春の固い空気が響き合います。

〈以下略〉

風土集



南うみを選

下阿田木神社

弓始一矢刈田に突きささる
弓始峡の十戸のひきしまる
産土の日向貫き弓始

岩出 池田 光子

初山河背すぢのばせと父のこゑ
藁の束根方にかぶせ山眠る

水戸 山田 健太

子の靴を踏みて上がるや年の礼
凍土を踏み来し猫の面構へ
喰積の黒豆をまづ撮み食ひ
埋火や隙間だらけの父の里
教室の床に競ひて筆始め

五條 上辻 蒼人

裏白に山の匂ひの反り加減
二日目に箸付けてゐるにらみ鯛
天の声地の声風の糸緩み
み仏のお下がりがりも入れ粥柱

初葉師山の湿りの石の階 横浜 三谷さかゆ

ぼつくりを履いて花びら餅買ひに
メレンゲの角きはやかや二月来る
噓して今出来し句を忘じけり
看板の無き山小屋の牡丹鍋

挽ぎ落とししみかなぞへを転がりぬ 川崎 小山 寿子
初鴉真白き朝を斬り開く

数の子や喜怒哀楽をぶちぶちと
花びらを小判とみたり福寿草
寒月や心のたがを締め直す
雪うさぎ崩れて紅き泪かな いわき 森高さよこ
幼らの笑ひとび交ふ初湯かな

分け合へる勅題菓子の夢の色
初みくじ「口慎めば吉」とあり
神域を出て抱く破魔矢一つかな